

《焦点5》「当事者として感じ、語らう」の再考

すべての人が当事者であるということ

藤田裕一*

*神戸学院大学

Everyone is Person Concerned

Yuichi Fujita*

* Kobe Gakuin University

キーワード	
当事者	person concerned
当事者性	nature of person concerned
語り	narrative
人生の意味	meanings of life
共感	sympathy

I. はじめに

第34回日本保健医療行動科学会学術大会は、筆者にとって忘れることのできない大会の1つとなった。なぜそのように感じたのかについて、今静かに振り返るなかで、気づいたことをありのままに率直に述べてゆきたい。

II. 大会のテーマに示された魅力

奈良で開催されたこの学術大会の掲げられたテーマは、筆者にとって今まで見たこと、経験したことのないものであった。

「当事者として感じ、語らう～悠久の都・ならにて～」というテーマであるが、そもそも「当事者」を本気で扱ったという大会を私は今まで経験したことはなかった。

梓川大会長が大会抄録集の冒頭挨拶文の中で述べられているが、「すべての人々が当事者として、当事者を考えあう・感じあう」¹⁾、ここに正面から問うていく大会に徹していく、このことが大会の底辺に一貫して流れていたと強く感じた。

そもそも当事者とは何だろうか。一般的には（筆者もそうだが）障害者の当事者、難病の当事者、被害者の当事者…というように、ある特定の経験をし

ている、あるいはした本人というような、限定的な狭い範囲で捉えている見方が多いのではないだろうか。

これも梓川大会長が大会抄録集の冒頭挨拶文の中で述べられているが、「私たちは広く当事者を捉えていきたいのです。『いったい当事者とは誰なのか』『すべての人々が当事者ではないか』という本質を自問することから出発し、ノーマルな思考と理念をもって、『当事者』というテーマに果敢にチャレンジをして、皆さんとともに原点に立ち返りたい」¹⁾というこの文章は鮮烈である。大会長や今回の大会の実行委員含め全員、当事者を先に述べたような限定的な狭い範囲の捉え方をせず、「すべての人々が当事者」という捉え方をして大会に臨んだのである。

このテーマ、この当事者の捉え方があったからこそ、基調講演、能楽公演、七夕プロジェクト、シンポジウム、一般演題（口頭発表、ポスター発表）、懇親会、わかちあいワークショップ、わかちあいワークショップ共有…などの中身、内容になったのではないかと思われる。

III. 当事者性について

先にも述べた通り、一般的には当事者を限定的な

狭い範囲で捉えている見方が多いのではないかと考えられる。このことと関連するのではないかという言葉として「当事者の思いは当事者でなければわからない」ということもしばしば聞かれる。筆者は身体障害者の当事者であるので、この言葉について理解できるし、ある種の共感もできるのだが、他方で少々納得がいけない部分もあった。もしも当事者の思いが真に当事者でなければ絶対にわからないとすれば、例えば障害者当事者の思いは障害のない人には永遠に理解や共感されることはなく、両者はいつまでも真に理解し合うことはできない、ということに繋がりがかねないからである。このことは障害者の当事者としては少し納得がいけないし、社会において生きる中で、これはある意味悲しいことでもあるだろう。

このような当事者ということに関連づけて、近年、当事者性ということが盛んに言われ始めてきている。当事者性について松岡は、「個人や集団の当事者としての特性を示す実体概念というよりも、『当事者』またはその問題の事象と学習者との距離感を示す相対的な尺度」²⁾「『当事者』またはその問題との心理的・物理的な関係の深まりを示す度合い」²⁾と述べている。当事者性とは、当事者を周囲の人がどのように理解し、また、当事者と周囲の人がどれだけ関係が深まったかを示すものであるという指摘である。

このような当事者性という考え方を踏まえると、「当事者の思いは当事者でなければわからない」ということからは少なくとも大きく一步前進し、当事者でなくとも、当事者の人の思いの中で理解しあえる部分は理解し、共感しあえる部分は共感していこうという姿勢につながると考えられる。

しかしこの松岡の指摘を踏まえたとしても、よくよく冷静に考えてみれば、一般的な当事者の捉え方、それは障害者の当事者、難病の当事者、被害者の当事者…というような、ある特定の経験をしている(あるいはした)本人というような、限定的な狭い範囲で捉えている見方、その捉え方自体は大きく変わっていないのである。したがってこの当事者性という考え方も、狭い範囲で捉えられた当事者を周囲の人が理解できる、あるいは共感できる部分は理解し共

感するということを意味すると考えられる。

そこで改めて取り上げたいのが、このたびの学術大会のテーマの中にある「すべての人が当事者」であるという視点である。これは上述した当事者性の視点のさらに、いやむしろはるかに先を行った視点ではないだろうか。そもそも人は何かに所属し、また何かを抱えて生きているわけで、その点においては例えば専門職者、支援者であってもその立場としては紛れもない当事者であり、当事者性を持っているわけである。そのすべての人々が当事者として当事者性を含めて理解しあおうというのが大会のテーマの底辺にあったのであるから、筆者にとっては鮮烈でありかつ感動的、つまりその文字通り、心が動かされ揺さぶられた大会であった。

IV. 感じ、語らうということ

大会抄録集の基調講演の文章において、梓川大会長が以下のことを述べておられる。

「人間は、物語をつくる存在であり、物語を語る存在であると言われます。その物語には、その方の独自の歩みと意味世界はあるのかもしれませんが、普段の日常生活においては、人生の物語や意味世界に触れたりすることはなかなかないかもしれません。あるとき苦悩を抱えることで、ある人は自らの人生をふりかえり、人生の物語に向き合うチャンスを得ることができる。そこでどのように生きてきたのかを問い、そして自分の人生に向き合うことができる。人生の意味、苦悩の意味を汲み取ることもできる。生きていくことを捉える価値の変容にもつながる。これらはあくまで『ある経験』かもしれませんが、これは人が生きていく中でとても苦しいことかも知れませんが、実は必要なことでもあると思えるのです。」¹⁾

「基調講演では、『出会い』『関わり』『ささえあい』から人生の意味を語ります。人はどのように自分の人生を捉えていくのか。どのように自分の人生に価値を見だして、どのように自ら変容していくのか、人生の物語を感じあう空間で、人生がもつ意味世界を、皆さんとともに味わいたいのです。」¹⁾

この大会長が述べている内容は、大会テーマの「当事者として感じ、語らう」ということ、とりわけ「感

じ、語らう」ということに強く繋がる重要な部分であると思われる。人は生きる中で様々な経験をし、それらを通して人生の意味を見いだすことができる存在であると考えられるが、それは「語り」そして他者との「語り合い」あればこそではないだろうか。

人生の意味の変化を語ったものとしては例えばライフストーリーがあり、人生の意味の変化に着目して調査を行うインタビュー法として、ライフストーリー法という質的研究の調査法もある。生涯発達研究においては、例えば中途障害になった後の人生において、当事者本人の「障害の意味」がどのように変化するかということ、ライフストーリーを分析することを通して明らかにしようとしている。

生涯発達心理学研究のやまだは、「生涯発達研究では人の心身の機能の変化を人生全体を通してみようとする。それは、『人は人生全体を通して発達し続ける』といった何らかの望ましいとされる状態に向かう発達観でなく、人間の可塑性および変化の可能性の大きさに注目している」³⁾と述べている。Baltesは生涯発達心理学の理論的観点として、変化の多方向性、獲得と喪失としての発達、可塑性、歴史的文化的条件、文脈主義等を挙げている⁴⁾。中途身体障害者の心理社会的問題を研究している田垣は、「獲得と喪失としての発達」が重要であることを指摘⁵⁾した上で、「この観点から中途障害をみれば、受傷初期の障害への否定的な意味づけは肯定的に変わる可能性がある」⁵⁾と述べ、本人が語るライフストーリーを調べることの意義を示している。

Ⅱの中でも触れたように、今回の学術大会では当事者や当事者性を従来のように狭く捉えるのではなく、誰もが何らかの当事者であるという視点に立って「感じ、語らう」ということがテーマとなっていた。語りとはナラティブであり、ナラティブ自体に近年注目が高まっているが、「感じ、語らう」こと、つまり何らかの当事者としての人々が集い、率直に忌憚なく語り、あるいは聴き、語り合うということ。そのことを通して大会参加者の交互作用が生まれ、新たなナラティブが生成され続けたのではないだろうか。そしてそれらを通して、お互いに何らかの当事者として、疾患や障害、専門職、家族…として大会の中で当事者としての人生の意味づけがそれぞれ

変容したのではないだろうか。誰もが何らかの当事者であるという視点は、誰もが他人事ではなく自分事であるという意識を高める上でも重要であると思われるし、このような意識が相互の共感にも繋がるのではないかとと思われる。

V. 大会の一参加者として感じたこと

ここまで第34回日本保健医療行動科学会学術大会のことに関して、少々色々なことと関連づけながら自由に述べてきたが、筆者も大会の一参加者であり、その立場、その当事者の立場から自由に感じたことを（筆者の主観が相当入るが）述べてみたい。

筆者は大会においては、1日目の口頭発表を行った。「障害と共に生きる」というセッションの中の1題であり、障害者の当事者に関する内容を発表した。今でも忘れられないのが、発表後のフロアの方とのやり取りである。研究者あるいは専門職の支援者の立場から質問を下さった方がおられたが、その方々との時間も限られた中でのコミュニケーションの中で、今までの学会発表では経験したことのないようなあたたかな、共感的な対話を（このことを正確に言語化するのが難しいが）経験した。

また、2日目の「わかちあいワークショップ」では、「健康障がいをもつ立場から」の部屋の小グループにおいてファシリテーター経験もさせて頂いたが、この時間の中で「今話して下さったこと、とてもわかる！」「そうそう！」「似た思いを持っている人がいるんだ！」…というような思いになれたこと自体がかけがえのない経験となった。

そして何より、筆者は大会実行委員の一員として、梓川大会長をはじめとする実行委員の方々と、約1年の期間をともにするという、まことに得難い経験することができた。（私自身が実行委員として何かのお役に立てたということは皆無だったと思われるが）私のこれからの人生において、実行委員の中におられたさまざまなバックグラウンドをお持ちの方々（大学教員、障害や難病の当事者、多岐にわたる対人援助専門職、学生…）にお目にかかり、繋がることができたことは、言葉に言い尽くせぬほどの大きな財産となった。この実行委員会の場合こそ、それぞれの当事者の立場で、熱く率直に忌憚なく語り

あった、まさにその現場ではなかったかと感じている。このことは心の底から申し上げたいことである。

VI. おわりに

大会抄録集の梓川大会長の「大会長あいさつ」のタイトル名は「枠を越えて、そして原点を回帰して」¹⁾であったが、今回「当事者」ということに果敢にチャレンジし、またその当事者というものの枠を従来のものとは大きく越えて捉えようとチャレンジした第34回学術大会が、日本保健医療行動科学会の原点へと繋がったのだろうか。このことの答えは若輩の筆者には到底出すことすらできない。この大会の「当事者として感じ、語らう」というテーマを通して筆者自身、この日本保健医療行動科学会の原点とは何かについて、今改めて突き詰めて考えたという思いに強く駆られている。

文献

- 1) 日本保健医療行動科学会：第34回日本保健医療行動科学会プログラム・抄録集，2019
- 2) 松岡廣路：福祉教育・ボランティア学習の新機軸－当事者性・エンパワメント－，福祉教育・ボランティア学習と当事者性（日本福祉教育・ボランティア学習学会），19，2006
- 3) Baltes, P. B. : Theoretical proposition of life-span developmental psychology: On the dynamics between growth and decline. *Developmental Psychology*, 23: 611-626, 1987
- 4) やまだようこ：生涯発達心理学をとらえるモデル 無藤隆，やまだようこ（編），生涯発達心理学とは何か；理論と方法，金子書房，東京，1995
- 5) 田垣正晋：中途障害者における「障害の意味」の生涯発達の变化—脊髄損傷者が語るライフストーリーから— ナカニシヤ出版，京都，2007